

全国モーターボート競走  
施行者協議会助成事業

平成 26 年 度

# 地域医療実習報告書



自治医科大学医学部

## はじめに

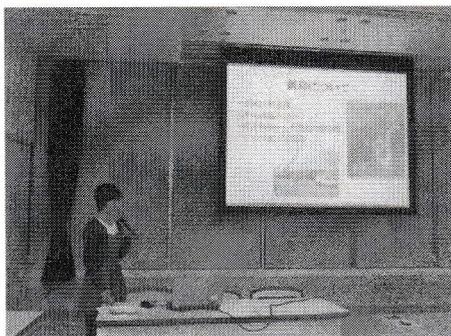
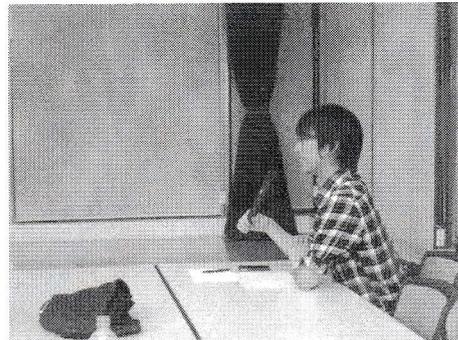
本書は、今年の7月から9月にかけて行われた、平成26年度地域医療派遣団の報告書をまとめたものとなっております。

地域医療派遣団は、地域医療の現状を理解し、地域医療への意欲をかきたてると共に、自身の将来のために幅広い知見を得る機会を、自治医大生に提供し支援することを目的とした事業です。毎年希望した学生が、夏休みを利用して、自身の出身都道府県と異なる地域の診療所や中核病院で働く卒業生を訪れて、見学・研修させていただいております。

今年地域医療派遣団では、1年生から5年生まで、9グループ計12名の学生が参加しました。各グループが研修先を自由に選択できるという特徴を活かし、各々の関心のある現場へと向かいました。そして、初めて赴いた地で見聞きし感じ取った内容をまとめた報告書は、机上の学習だけでは十分に学ぶことのできない地域医療の現状が随所に見られる、大変興味深いものに仕上がっております。

最後に、本書を通じて、皆さんが自身の地域の現状について興味を持ち、何か考えるきっかけとなってもらえれば幸いです。また、来年度以降も本企画は継続していきますので、興味のある学生は是非参加してみてください。

自治医科大学 卒後対策委員長 医学部4年 住吉秀太郎



## 平成26年度地域医療実習参加者一覧

No	施設名	受入卒業生(期)	実習学生			期間
			氏名	学年	出身都道府県	
1	東京都 小笠原村立 小笠原村母島診療所	高山 陽 (東京33期)	小田島 歆	5年	岩手県	7/28~7/29
2	和歌山県 高野町立 高野山総合診療所	廣内 幸雄 (和歌山1期)	中川 愛	3年	大阪府	8/12~8/14
3	沖縄県 渡嘉敷診療所	村田 祥子 (沖縄33期)	守本 陽一	3年	兵庫県	8/15~8/17
4	島根県 隠岐広域連合立 隠岐島前病院	白石 吉彦 (徳島15期)	小山 史恭	1年	鳥取県	8/20~8/22
5	沖縄県 伊是名診療所	与那覇 翔 (沖縄34期)	落合 秀也	2年	青森県	8/25~8/27
			手塚 雄大	2年	栃木県	
6	岐阜県 白川村国民健康保険 白川診療所/平瀬診療所	伊左次 悟 (岐阜26期)	風間 菜摘	3年	埼玉県	8/25~8/28
7	東京都 新島村国民健康保険 本村診療所	岡田 祐樹 (東京31期)	齊藤 志穂	3年	山形県	8/25~8/28
8	鹿児島県 永田へき地出張診療所/ 口永良部島へき地出張診療所	堂嶽 洋一 (鹿児島30期)	佐々木 友香	4年	京都府	8/25~8/29
			平田 まりの	4年	埼玉県	
9	沖縄県 渡嘉敷診療所	村田 祥子 (沖縄33期)	植村 和平	4年	北海道	9/3~9/4
			高橋 寛	4年	山形県	

計	8施設	9グループ	12名
---	-----	-------	-----

## 2. 和歌山県・高野町立高野山総合診療所

3年 中川 愛

実習施設 高野町立高野山総合診療所  
実習期間 8月12日～8月14日  
指導医 廣内 幸雄 先生（1期）

### 研修スケジュール

	午前	午後
8月12日	オリエンテーション 施設見学、町役場	訪問看護、外来
8月13日	検査、訪問診療	外来、放射線
8月14日	検査室、訪問看護	外来、まとめ

普段の学校生活ではなかなか見学することのできない地域医療、特に今回は僻地かつ観光地の地域医療をみることに、そして、その特徴や課題を知ること、また、医師以外のメディカルの仕事を知ることを目的に研修に行きました。

高野町は和歌山県北東部、標高850mの山上の町です。和歌山県は温暖な地域ですが、高野山では例外的に雪が積もります。高野山は816年、弘法大師（空海）により開創された真言宗の聖地で、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されました。町の中心集落である高野山山上には、157の寺院、警察、消防、病院、小中学校、高校、大学までそろっており、我が国を代表する宗教、観光都市として多くの文化的遺産を有しています。町の人口の約4千人のうち、約千人が僧侶という独特の特色を持った町でもあります。高齢化は進行しており、人口は年々減少傾向です。それに対して高野山を訪れる観光客は年間約150万人。その中には多くの外国人観光客が含まれています。特にフランスでは「下界とは異なる時間が流れている町」として報道され、人気があるとされています。

さて、高野山総合診療所の前身である高野山病院は1980年から自治医大卒業生が中心となって勤務してきました。今回の研修を担当してくださった廣内先生も、1980年に派遣されて以来、高野山病院で勤務され、現在は病院長を務められています。最も数が多かった

ときに7名いた医師も、2006年からは4名に、そして病院が診療所になった翌年の2013年には3名になりました。そのうち1名が義務年限内で和歌山県から派遣されている自治医大卒業生です。副院長は現在病気のため休職中で、現在の常勤医は2名です。（さらに私が研修に行った時は、県から派遣されていた先生が病気の治療のために一時的に休まれていたため、実質、廣内先生お一人が常勤医という状況でした。）眼科と形成外科はそれぞれ他の病院からの非常勤の先生が週1で診察しています。

診療所は従来、24時間救急患者を受け入れてきました。ところが、先ほど述べましたように、常勤の医師が減少したため、2013年4月から、夜間の救急の受け入れを維持できなくなりました。現在、橋本市民病院や和歌山県立医科大学などから医師の応援をうけていますが、それでも夜間救急は参拝客の多い土曜日に対応するのがやっとという状況です。診療所から2次医療機関まで、車で片道最低1時間かかりますが、医師不足で診療所での急患の受け入れが困難になったため、町に2台しかない救急車がどちらも出払ってしまう場面が急増しています。こうした状況を受け、町は必死になって医師を確保しようとしていますが、なかなか人が見つからないのが現状のようです。来年2015年は高野山開創1200年で例年以上に多くの観光客が訪れることが予想されるそうですが、今の医療体制では厳しい状況になると言わざるを得ません。

高野山での医療の重要なもののひとつに観光地医療があります。1980年から2012年までの32年間で759人の観光客が入院しましたが、これは全入院患者の10人に1人以上が観光客だったこととなります。地元住民が入院する場合の疾病は消化器系、呼吸器系、循環器系の疾患が多いのに対し、観光客が入院する場合の疾病は圧倒的に損傷・中毒が多く、次に循環器系が多くなっています。外国人観光客の受診も多く、言葉が通じないときはスマホの翻訳アプリを利用しています。また、外国人観光客が治療費を現金で払うことができないケースが多かったため、クレジットカード払いにも対応しているそうです。

診療所では訪問診療と訪問看護を行っています。訪問看護の仕事内容は服薬管理、インスリン注射、清拭、入浴・トイレ介助、バイタルチェックなどです。ヘルパーと仕事内容が被っているところもありますが、病気がベースにあるとヘルパーの人が怖がってしまうことが多く、訪問看護の一環で行っているそうです。

訪問看護に行ってみて初めて患者さんの住んでいる状況がわかることもあります。とあるおばあちゃんは高野山山上の集落から少し離れたところに住んでいます。病院まで連れてくるのは、同居している高齢の娘です。家から診療所に向かう道はとても細く、大変危険なところでした。初めて訪問看護に行ったときは、今まで「診療所に来てください」となんと気軽に言っていたことか、なんと非情なことを要求していたのかと看護師さんは思ったそうです。

今回の研修では、診察室で診る場合と自宅で診る場合では患者さんの様子が全く違うのだなということを実感しました。リラックスした状態で診ることや、どのような居住環境なのか、どのように生活しているのかということを実際にみることは重要なことだと知ることができました。また、先生が自宅まで診に来てくださることが患者さんにとってとても安心なことなのだと感じました。高野山の住民は訪問診療や訪問看護を利用することにまだ慣れておらず、「お茶の一杯もだせずにごめんなさい」などと言って、医師や看護師をお客さん扱いなのが新鮮でした。

自分の住む地域で医療を行うということの難しさも知ることができました。診療所の訪問看護は、看取りが入らない限り24時間態勢ではありませんが、看護師自身も高野山に住んでおり、患者が知り合いであることがほとんどで、自宅に夜電話がかかってくることもあります。地域住民としての付き合いなどもあり、邪険にすることはできず、夜でも対応することもあるそうです。もちろん医師も同じです。勤務時間外に電話がかかってきたり、夕食に誘われたりと、患者さんとの距離がよくも悪くも近いです。全部対応しては体が持ちません。地域医療の継続のためには、自分の時間をしっかり持つことが大切なのだそうです。

アメリカ人の観光客が外来にこられたとき、研修医の先生が流暢な英語をしゃべられていたのにとっても驚きました。英語が御上手な理由を伺ったところ、学生時代にバックパッカーで海外に一人でよく行っていたり、5年生のときに1ヶ月ほどイギリスで臨床研修をしていたからでした。私はいままで、僻地に行ったら、英語は医学の論文を読むくらいしか使わないと思っていたのですが、海外からの患者さんの対応で役に立つのだと実感しました。

廣内先生がおっしゃられた、「光陰矢の如し、少年老いやすく学成り難し」というメッセージを忘れずに日々学んで行こうと思います。また、どんな経験もいつかどこかで役に立つと思うので、学生のうちにいろいろな経験をしようと思います。

最後になりましたが、高野山総合診療所所長廣内先生や事務長中尾さんをはじめ、今回の実習にご協力いただきました、診療所のみなさん、高野町の地域住民の方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。



## 編集後記

### 「へき地医療に回帰する」

本年度も、無事に地域医療派遣団の事業が終了し、関係者の皆様には心よりお礼申し上げます。先日10月27日に報告会を開催し、4年生の住吉秀太郎君（卒後対策委員）が司会を務め、学生課の皆さまをはじめ地域医療学センター地域医療学部門の中村剛史先生、森田喜紀先生にもご列席頂きました。

近年、地域医療の重要性が認識され、全国の医科大学に次々と「地域枠」が創設されております。自治医科大学の設立の趣旨は「医療の谷間に灯をともし」ために医療に恵まれないへき地における医療の確保、向上と住民の福祉の増進を図ることです。現在でも多くの卒業生がへき地医療に従事しており、学生は本地域医療派遣団を通して離島をはじめとするへき地に勤務する自治医大の卒業生の後ろ姿を見ることができます。

学生の報告を聞いて、改めて離島をはじめとする過酷な状況のへき地であるからこそ得ることができることが本当に多いと思いました。勿論、その地域における独特の疾患や、地理的な状況、住民の生活習慣や自然環境を勘案しながらどのように住民の健康問題に対応するかを学ぶことができますが、それ以上に医師としての素養や地域医療マインドの醸成にとっても重要な場であると感じました。現在の医学教育では、「どのような健康問題であっても目の前の患者さんに最善を尽くす」、「地域の需要に合わせて医療を提供する」といった地域医療マインドをどのように醸成するかまでは、まだまだ十分な議論ができておりません。今回、実習に参加して発表した多くの学生は、将来ご指導頂いた医師のようになりたいと口々に申しております。学生達は、本実習を通してへき地で診療に従事する先輩方の後ろ姿から診療に対する重要な姿勢も感じ取っていたに違いありません。今回の報告会を通して、へき地における臨床実習の有用性を改めて認識しました。さらに、学生にとってこの経験は一生の財産になることと確信しました。

最後になりますが全国モーターボート競走施行者協議会及び、多忙な診療業務の中、学生の面倒をみて下さいました先生方に重ねてお礼申し上げます。

平成26年11月19日

自治医科大学地域医療学センター 地域医療学部門

竹島太郎（静岡県23期自治医科大学卒）

